

この本よんだ？

～りいぶる BOOK プラス～



新しいパパの教科書

NPO法人ファザーリング・ジャパン 著 学研教育出版 2013年 (M: 男性学)

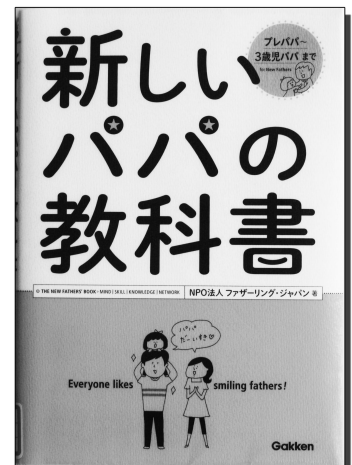
イクメンという言葉が世に出てから久しい。本書は「父親であることを楽しむ生き方=Fatherring」を提唱するNPO法人ファザーリング・ジャパンの講師陣により、これからパパになる人や小さいお子さんがいるパパに向けて書かれたものである。全体が6つの章、29の項目で構成され、子育てを楽しむための心得や知識、スキルなどが学べるようになっている。

第1章「パパ育児のススメ」では、古い父親像から「新しいパパ」へのバージョンアップを。第2章「パートナーシップ」では、ママへのケアの大切さを。(これだけであれば夫婦げんかは確実に減る!) 第3章「パパのための子育て基礎知識」、第4章「育児・家事のパパテクニック」では実用的な知識やテクニックが満載。ここに多く

のページが割かれている。第5章「パパとしてのワーク・ライフ・バランス」では、仕事と育児、両立のためのヒントを。そして第6章は「”イクメン”から”イクメン”へ」と題しパパ友づくりについて書かれている。

子どもが欲しいが欲しくないかに拘わらず、これから結婚する男性には必読の書。知っておいて損はない事が結構書かれていると思う。妻の方から夫に薦めてみるのもよい。

(0.9)



上野千鶴子が聞く 小笠原先生、ひとりで家で死ねますか？

上野千鶴子 笠原文雄 著 朝日新聞出版 2013年 (L:高齢社会・福祉)

この本にでてくる聞き手の上野千鶴子氏はりいぶるにも蔵書がたくさんある有名な女性学の研究者であるが、最近では『おひとりさまの老後』とか『ケアの社会学』などの介護・高齢社会問題にも取り組んでおられる。このような中、老人の「家で死にたい」という願いが多いことがわかってきて、しかも非婚または死別、離婚などで家族がいない「おひとりさま」でもそれが可能なのか？という疑問をもつようになった。

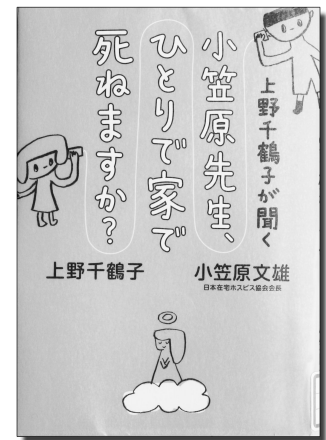
ここで、上野氏の質問に答えられているのは、小笠原文雄氏、日本在宅ホスピス協会会長で、自ら小笠原内科を開業し、在宅ホスピス緩和ケアを実践する医師である。

「希望死・満足死・納得死」を提唱してい

る。自分の住み慣れた家で、納得し、仏のように安らかな顔で亡くなるにはどうしたらいいか？何を準備しておけばいいのか？ということが書かれている。

小笠原先生の言うようにひとりで安らかに死を迎えるためには、それを支える医療、看護、介護体制、そして本人の生前準備があればそれも可能になるのだなと勉強になった。

(か)



優雅な暮らしにおカネは要らない 貴族式シンプルライフのすすめ

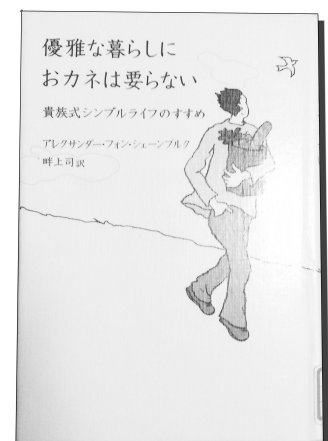
アレクサンダー・フォン・シーンブルク 著 畔上司 訳 2006年 集英社インターナショナル (K:エッセイ・文学)

「日々仕事で忙しく過ごし、車に毎日乗り、週末はショッピングセンターで買い物をする。」こんな自分の毎日ですが、最近少し疑問を抱いていました。きっかけは子どもの一言で、「お買い物行くの？」です。ひょっとして私は買い物ばかりしている？もっと突っ込んで考えると、無理に仕事を持って忙しく過ごし、週末の休みもせつせと出掛けて何かを買うことで充実していると思いついて入っているのではないだろうか、と思えてきたのです。何が悪いのかと問われると答えられないのですが、何かが違う気がする。

そんな個人的な疑問について深く考えてみるきっかけをこの本はくれました。「労働は必要悪だ」、「車なんて要らない」、「少な

い買い物で暮らしをすっきりさせよう」など、様々な問題提起がされており、自分の生活と重ね合わせて考えられるのです。自分の価値観を持ち、何が幸せなのかを考えなくてはならない、と思えます。もしも、日々の暮らしに関して私のように感じている方がいらっしゃったら、ぜひ読んでいただきたい本です。

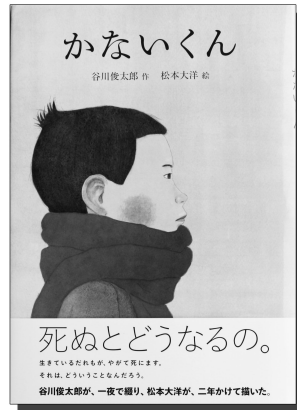
(A.T)



かないくん

谷川俊太郎 松本大洋 著 東京糸井重里事務所 2014年 (F:子育て)

本書は、詩人、谷川俊太郎の静かで優しい文章に、漫画家、松本大洋の存在感のある絵が描かれ、引き込まれていく。仕掛けもあり中表紙に薄い紙が使われ、



かないくんがいない寂しさが伝わってくる。ページをめくり読み進めていくと空白部分からは読み手の感情が投入されやすくなっている。

本書の帯に「死ぬとどうなるの。」と読者に問いかける文が書かれている。死は重いテーマではあるが本書は優しく教えてくれる。

年齢を重ねるたび、また、看取ることにより、死は違うものになっていく。本書を通して、新たな発見があるかもしれない。子供から大人まで、どの世代でも読める絵本です。読み重ねるたび、ちがう感情を与えてくれる、記憶に残る1冊になると思います。ぜひ、手に取って読んでみてください。(K)

世界を変えた10人の女性 お茶の水女子大学特別講義

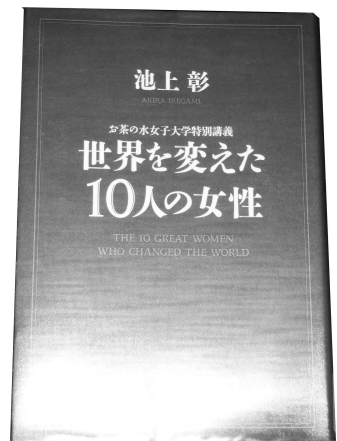
池上彰 著 文芸春秋 2013年 (K:エッセイ・文学)

この本は、ジャーナリストの池上彰がお茶の水女子大学で2012年末から2013年初めにかけて2ヵ月間集中講義を行った内容をまとめたものです。

10人の女性とは、アウンサンスーチー(政治家)、アニータ・ロディック(女性実業家)、マザー・テレサ(カトリック教会修道女)、ベティ・フリーダン(女性解放運動家)、マーガレット・サッチャー(元英国首相)、フローレンス・ナイチンゲール(看護教育学者)、マリー・キュリー(物理学者・化学者)、緒方貞子(元国連難民高等弁務官)、ワンガリ・マータイ(環境保護活動家)、ベアテ・シロタ・ゴードン(元GHQ職員)です。

彼は「この講義では一般的な印象をあえて打ち破ろうとした部分もある」と述べています。たとえばアウンサンスーチーの場合、「彼女に直接会った人にいわせるとお嬢

様として育てられたせいか、周りの者に対する態度が田中真紀子を彷彿させると言うのです」といった具合です。またマザー・テレサについても「誰からも尊敬される聖女と思っ



ている人が多いと思うが、実は世界中から非難を受けた一面もある」と語っています。

この10人の女性についての講義の後、学生にレポートを提出させ、それを元にディスカッションした内容も収められており、大学時代に戻って講義を受けているような感じを受ける、とても興味深い一冊です。

(花賀)

映画と私

羽田澄子 著 晶文社 2002年 (K:エッセイ・文学)

羽田澄子は「薄墨の桜」で世に出た優れた記録映画製作者である。この本は当時女性には狭き門であった世界で、ひたすら映画づくりに邁進した人生がエッセイ風に書かれている。

著者は1926年大連に生まれ、敗戦後にようよう一家で引き揚げてきて後、23歳で創立直後の岩波映画製作所に入所した。定年までの30余年間、そしてその後も記録映画製作の道を歩み続けた。

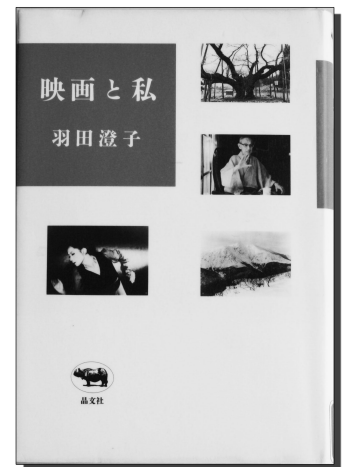
そもそも記録映画とは、企業や役所などが企画したものを製作資金の提供を受けて映画会社がつくるのであるから、作品はスポンサーの意に沿うものでなくてはならない。

ある時期から「自分のつくりたいと思ったものをつくりたいようにつくりたい」と思うようになった著者。偶然岐阜県で樹齢1400余年の巨大な桜樹に出会い、魅せられ

て自らの脚本・演出で映画をつくる決意をする。会社の仕事の合間にカメラマンとただ二人で撮影に通うなど苦労をかさねて、6年半かかって初の自主作品「薄墨の桜」を完成させたのだった。

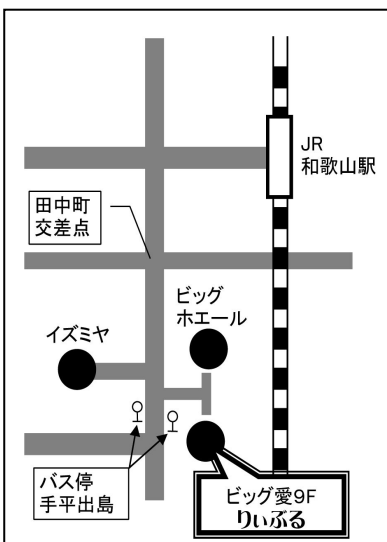
高い評価を得たこの作品を機に新しい道、新しい世界が拓かれ、以後、「早池峰の賦」、「痴呆性老人の世界」、「歌舞伎役者 片岡仁左衛門」などかすかすの秀作が自主製作されていった。それらの製作にかかわる感動的な詳細を読むと、その映画を見たい強烈な思いにかられる。

(大空)



※“りいぶる”での分類記号一覧

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:こころ・癒し F:子育て G:からだ
H:セクシュアリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他
P:AV 資料 Q:コミック R:NPO サポートセンター所蔵図書



この本 よんだ? 第8号 (2015年4月発行)

◇企画・発行 りいぶるぷらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

【編集後記】 春です！また心機一転新しい生活を始める人もいることだろうと思います。今回からイラスト担当がイラストレーターを目指している殿垣内能範氏にかわりました。今後が楽しみです。

これをお読みで何か始めたいと思っている本好きのあなた、私たちとボランティア書評誌を作ってみませんか？興味のあるかたは、メールでお問い合わせください。E-mail libreplus@yahoo.co.jp

なお、「この本よんだ？」のバックナンバーはりいぶるのHPにのっています。